コロナ禍における配布型子ども食堂の居場所機能
―「居場所なきフードパントリー」からの脱却の道―

岩瀬　圭佑

第１章　フードパントリーとは何か

本稿は、コロナ禍において普及した子ども食堂のフードパントリーという活動形態が持つ居場所、人とのつながり機能に着目し、子ども食堂の存在意義を明らかにする。第１章では、コロナが子ども食堂の活動に与えた影響、そしてそれによって変化、分岐した活動内容の考察を述べていく。第２章では、それを踏まえた調査方法と目的を、第３章では zoom インタビューの結果を表などで可視化した。第４章では、その調査結果から得られた知見及び考察を論じる。第５章では居場所、つながりという観点からコロナ禍にリスクを負いながらも活動を継続する必要性を述べる。第６章では調査結果を基にした今後の子ども食堂の展望を、筆者自身の考えと織り交ぜながら論じる。本稿によって、他の子ども食堂の活動状況を知り、さらには新たな活動にチャレンジを試みる方たちの背中を少しでも押すことができれば幸いである。

昨年は年間を通して新型コロナウイルスが猛威を振るった時期であった。オリンピックの延期や甲子園の中止に代表されるように、この新型コロナウイルスは様々な計画や人の想いを打ち破ってしまった。これは「子ども食堂」も例外ではない。子ども食堂というものは、その地域住民に無料あるいは低価格で栄養のあるご飯を提供する、居場所として開放することによってその地域住民の方たちのつなぎ目となるようなものを指している。これは近年急激な増加を見せており、NPO 法人全国こども食堂支援センター・むすびえによると、全国で 5080 か所（判明分）存在している。また 2020 年以降のコロナ禍に限っても約 200 か所増加している。時代を追うごとに子ども食堂のニーズが高まり、子ども食堂と地域住民がより一層一体となれていると考えられる。従来の活動ならば、施設の中でたくさんの人たちと仲良くご飯を作って食べる、クリスマス、お正月、夏祭りなど季節ごとで催し物を行いながら、食育という大きな目標をもって活動を続けてきた団体が多かった。

ところが、新型コロナウイルスの影響により、本来「密」を作るための子ども食堂がいかに「密」を避けて行動するか、という考えにシフトチェンジしなければならなくなってしまった。このような考えの下、各子ども食堂はフードパントリーや宅配、ドライブスルーなど、密を作らずリスクを最小限に抑えた活動を選択しているところも存在している。筆者はこの部分に着目したい。会食型に伴う人々の交流、そこから生まれる煩わしさや恥の文化の存在を払拭できる配布型からの派生形態が生まれた要因を分析し、メリットデメリットを考察していく。そして会食や交流を伴わない活動形態においても、人々の心の拠り所（居場所）や地域の核としてあり続ける子ども食堂の性質に着目し、居場所、つながり論の文献と絡めながら子ども食堂のあるべき姿を考察していく。

第２章　オンラインインタビューを中心に

年間で前期と後期とを合わせて、15か所あまりの子ども食堂運営者の方々にzoomで、活動を始めたきっかけ、自治体や社協との連携内容（望んでいること）周辺地域の困窮度合い、寄付の状況、さらにコロナ禍前、真っ只中、アフターコロナになりつつある現在の主に３つの領域において参加者の推移、活動形態の変化、活動状況の変容など、その子ども食堂に関する様々な事をお聞きした。前述のとおり、本稿の目的はコロナ禍において多様化した活動形態を分析・考察することで、配布型の子ども食堂の役割や機能を明らかにするものなので、主に活動形態に関する情報を重点的に抽出していく。

第３章　コロナ禍の子ども食堂の活動形態

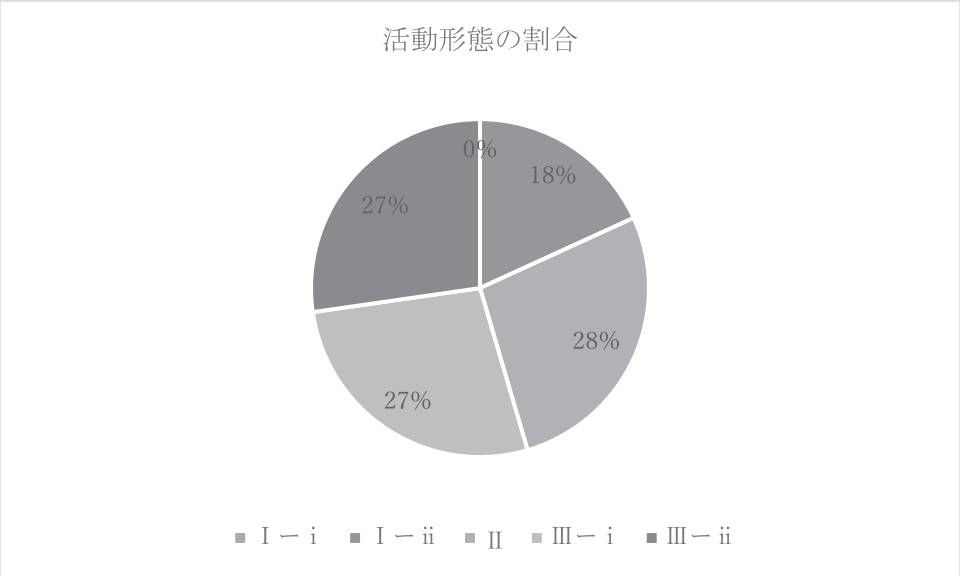
たくさんの子ども食堂にインタビューを行った結果、コロナ禍において各子ども食堂は、多少なりともその活動を行うにあたり試行錯誤を加えてきた。ここで、zoomインタビューを下に、各子ども食堂の現在の活動形態を分類する。会食型をⅠ、会食型と配布型をⅡ、配布型のみをⅢとする。さらにⅠにおいて従来通りの活動を行っている所をｉ、人数制限、時間制など何かしらの制限を加えているところをⅱとする。Ⅲにおいては、通常のパントリー形式をｉ、コロナになってから何か特別な工夫を加えたところをⅱとする。下記表１を参照してわかる通り、多くの子ども食堂が会食形式からお弁当・食材配布形式にシフトチェンジしていることが見て取れる。印象的だったのが、のわミー子ども食堂の食料の宅配、訪問者の送り迎え、日進きずな子ども食堂のドライブスルー形式　岡田さんの台所の高齢の方限定での宅配訪問などである。12月15日に行った「ソーネみんなでごはん」のインタビューでは、清川はコロナ禍において多用していた配布型の形態をこれからも継続していきたいと意気込んでいる。

子ども食堂名		コロナ禍での主な活動形態	
キッチンキング子ども食堂		Ⅰ－ⅱ	
ソーネみんなでごはん		Ⅱ	
パークサイド		Ⅲ－ｉ	
子ども食堂Qchan		基本Ⅰ－ｉ　限定的に300食だけお弁当配布した時期も	
のわミー子ども食堂		Ⅰ－ⅱ＋　週３で食料配布	Ⅲ－ⅱ
		食材を渡し、寄付され相互交流型のパントリー	
日進きずな子ども食堂		Ⅲ－ⅱ	
よつ葉子ども食堂		Ⅲ－ｉ	
東山ぐうぐう食堂		Ⅱ	
子ども食堂にこにこごはん		Ⅲ－ｉ	
（コロナ禍での立ち上げ）			
つなしょ		高齢者の方たちが作ったマスクを学校へ配布	
		食材をもらいに来た人が誰かにおすそ分けできる仕組み	
岡田さんの台所		昨年4.5月まではⅢ－ｉのみ	
		それ以降はⅡに移行　高齢者限定でⅢ－ⅱ	

【表１】各子ども食堂の主な活動形態まとめ

※会食型＝Ⅰ　従来通りの活動ⅰ
　　何らかの制限をしながらの活動ⅱ
会食型と配布型の併用＝Ⅱ
配布型＝Ⅲ　通常のフードパントリーⅰ
　　コロナ禍で何らかの工夫を加えているⅱ

この表１を参照してわかる通り、コロナ禍での主な活動形態は配布形式に重点を置いているものがほとんどである。このzoomインタビューを通してわかったことがある。それは「コロナだから」「他の子ども食堂がやっているから」という理由でシフトチェンジをする、あえて最初から配布型に限定しているわけではない、ということである。「ソーネみんなでごはん」、「よつ葉子ども食堂」は会食形式から配布形式に移行したことにより、会食形式では都合上対象者を子育て家庭だけなど限定せざるを得なかったところ配布形式になったことで対象者、時間関係なく誰もが受け取れるようになったと指摘した。「日進きずな子ども食堂」もコロナ禍により配布形式に移った一つであるが、屋内でのパントリーを行う環境が無かった為、屋外においてドライブスルー形式を立案し実行に移った。これは非常に評判が多いものだったという。この子ども食堂が位置する日進市は車が無いと不便な環境であり、そこに着目し生み出されたアイデアである。また、車が無くドライブスルーに参加できない家庭には、社協から認められた３か所には直接宅配し、それ以外の家庭に対してはコンビニで食材を受け取れることのできるサービスを導入している。このように元々会食型で活動を進めてきた子ども食堂がコロナにより対象者に異なるアプローチを試みている所がほとんどであるが、「つなしょ」のようにマスクを作りそれを学校や「つなしょ」で配ることやお互いにお裾分けを行うこと、他のホームレス支援団体との交流が生まれそこで新たな支援先を確保するなど、コロナによって活動の裾野を多方面に広げたことによって新たな繋がり、活動形態が生まれていることがわかる。



【図１】コロナ禍での主な活動形態

図１はインタビューを行った子ども食堂の現在の活動形態の割合である。これを見ると全

体的に配布型だけには偏らず、それぞれが考える最善の策を地域住民に向けて打ち出していることがわかる。だが、やはり一番多かった活動形態は配布型である。これは他の方策よりも比較的難易度が低く、この活動を開催するに至るまでの道のりが比較的容易であることが考えられる。実際に、コロナ禍での立ち上げとなった「岡崎ニコニコごはん」では活動開始の際に、会食型から始めるか迷ったそうだが今はコロナ禍ということもあり、まずは気軽に来ていただける配布型から始めていこうという考えを持っていた。前述したが、「ソーネみんなでごはん」では現状会食型で活動できているが、あえて配布型も併用していきたいという想いがある。会食型では時間がご飯時と限定されていることもあって会社勤めしている方をはじめ、中々参加できないという側面もある。そうなってしまうと、どうしても対象者が限定され本当に届けたい人に届かないような状況も発生するだろう。だが配布型では時間関係なく誰でも受け取れるというポジティブな面も兼ね備えている為、こちらも継続していきたいと意気込んでいる。配布型は基本的にすべての子ども食堂において対象者を限定せず、誰にも平等で配っている。コロナ禍で人数制限ある中で会食を行うよりもやりやすく、リスクも少ない配布型を選択する子ども食堂が多いのは納得の結果だろう。そして特筆するべきは、この状況下で生まれた新たなスタイルである宅配やドライブスルー、コンビニでの食材受け取りである。子ども食堂最大の敵である「密の回避」から生まれたこの形態は一見子ども食堂本来の良さから対極に位置するものかもしれないが、今後ニーズは高まると予想する。このように、コロナウイルスによって密の考慮が叫ばれる世の中に変貌して半ば強制的に配布型に移行した。その中で、運営者の何とかして地域の方たちに食材を配りたいという強い気持ちが配布型からの派生形態普及に関与していると考える。

第４章　コロナ禍において配布型が重宝される本当の理由に迫る

本章は調査結果から得られた知見を考察したものである。現在、コロナ禍において様々な子ども食堂が活動形態を模索しながらの日々である。この状況なので、何が正解なのかがはっきりしない部分もある。そういった中で前述したような、多様な方法によって地域住民に幸せを届けている子ども食堂が多く存在するのも事実である。今までは会食形式だったものが、コロナ禍において食料配布型、車でのドライブスルー、密を考慮して宅配、送り迎えという形をとってきた子ども食堂が多数存在している。一見してみれば、従来の形が失われてかつての賑やか、華やかさが失われてしまったようにも思えるがこの活動にシフトしたことによって以外なメリットも生まれている。

それを考察するにおいて重要なのが以前講義で取り扱った「恥の文化」という存在である。会食という形で大々的に開催すると、この心理が働いて中々足を運べない方たちが沢山いると思う。だが、コロナ禍に突入して子ども食堂の最大の特徴であった、その地域に「密を作り出す」というものができなくなった。そこで生まれたのが食料配布、宅配、少人数での会食、などのいわゆるひっそりとした活動である。これにより比較的子ども食堂に訪問しやすくなったのではないかと思う。「キッチンキング子ども食堂」代表の山野は「会食だとどこか恥ずかしくて中に入ってこれない人もいるんじゃないか、実際私がそうなんです。配布型はお弁当をもらったらそれでおしまいだから、来る人は来やすいんじゃないか。」と主張した。これはドライブスルー形式、宅配形式、コンビニ受け取り形式にも同じようなことが言えるのではないか。コロナ禍によって今までは会食型が原則であったが、密を考慮するという目

的のもと、各子ども食堂は配布型に移るといった行動に出た。そうすることによって今までは見えてこなかった地域の課題や抱える悩みなどが顕在化した。そういった中で柔軟に地域の課題に合わせた活動に変化させることができる子ども食堂多いのだ。本来は実際に来てくれた人にお食事などを用意することが基本だったが、密を考慮して活動形態を再考した。その結果子ども食堂側が能動的に住民の方たちに働きかけることが増えたことが一番大きいことだ。ここ数年で子ども食堂の知名度が上がり、「貧困のための施設」というレッテルは徐々に無くなりつつあると思うが、まだまだ抵抗を感じる部分が残っていることもあるだろう。「のわミー子ども食堂」、「日進きずな子ども食堂」では、今の生活を認めたくない、「のわミー子ども食堂」にはお世話になりたくないというような想いを抱えている方たち存在していることもまた事実だ。そういった方たちの想いと、コロナという密を作ることを避けさせる未知のウイルスとが相まって配布型を中心とした様々な活動形態が一気に普及してきたのではないか。

1節　社会的共通資本としての概念を踏まえながら

話は少し変わるが、我々成ゼミは昨年度から「社会的共通資本としての子ども食堂」というテーマを持って活動してきた。宇沢弘文氏によればこの社会的共通資本とは公園、道路など誰もが利用できる公共のものを指す。これが広く国民に受け入れられ、利用され、尚且つそこから生まれるサービスが無料または極めて低額でなければならない。そしてそれは安定的に維持、管理され、国民一人一人にいきわたるようなものでなければならない。我々はこの概念に子ども食堂を如何に当てはめることができるかを1年間議論してきた。ここで見えてきた課題はサービスが無料または低額でなければならないという部分はおおむねクリアできているが、それが国民に受け入れられているかと言われたら疑問が残る。この部分は前述した恥の文化の影響を大きく受けているのだと思う。やはり子ども食堂にお世話になろうとすると後ろ指を指されること、おかしな偏見を持たれるかもしれないという恐怖感が人々の足を引っ張っているのだろう。だか、コロナの到来により生活状況が苦しくなった家庭も多い。相対的に苦しむ人が増えたこと、子ども食堂の活動形態が会食型から配布型に移行し、そこからまた更に派生した多様な活動形態によって人々は子ども食堂から恩恵を受けやすくなったのではないか。子ども食堂へ行くことが特別な事であった以前と比べて、配布型という非交流の要素が強い活動に重きを置いていることによって人々が足を運びやすい条件が整っていると思う。そうなれば誰でも現地へ足を運ぶことができて、国民一人一人にいきわたるという項目は達成される。だが、子ども食堂としては配布型が単に食材、お弁当を住民の方たちに配るだけの目的としてはならない。あまりそういった状況が色濃くなってしまうとばら撒きなどと揶揄されるように、子ども食堂本来の存在意義は薄まってしまうだろう。だが、以前のように会食形式を採用しながら地域住民との交流を図ることは難しくなってしまった。この問題を解決する為に、ここで改めて子ども食堂が持つ居場所（つながり）機能を再確認し、コロナ禍に生み出した配布型の活動形態の可能性について考えていきたい。

第5章　居場所、つながりという観点から

本章はその地域における子ども食堂という居場所、つながりの必要性を述べたうえでコロナ禍においても感染というリスクを抱えながら活動を続ける意義を述べていく。そして配布

型の子ども食堂が、現代社会において人々の心の拠り所として存在し得る可能性について考察していく。まず居場所の定義であるが、「社会的居場所」と「人間的居場所」とを区別する（藤竹 2000：10）。社会的居場所とは、他人によって自分が必要とされている場所である。例えば、スポーツにおける自分のポジションや学校に馴染んでいる子どもにとっての学校である。この視点から見ると、学校に通うのが当たり前になっている世の中で学校に馴染めない子どもには居場所が無く、彼らは社会的居場所を失っているということになる。それに対して、人間的居場所は自分を取り戻すことのできる場、庇護的な安心できる場である（太田 2015：61）。「自然な形でそこに居て、自分を取り戻せる場所。自分がそこにいることが特に目立ったり、浮き上がったりしなくて、それ以上は何も求められない場所」（藤竹 2000：14）である。さらに、居場所とは単に誰かが存在する場所を意味しているわけではない（藤谷 2015：75）。一般に居場所とは「ここは、私の居場所だ」「私はここにいてもいいんだ」という安心感を持てるような場所であり（阿部彩 2011：117）、居場所がないとは「私はここにいてもいいんだ」という安心感を持てる場所が無いということであろう。子ども食堂と不登校の子どもとの関連性の高さを始め、子ども食堂はそういった悩みを抱える人たちの拠り所ともいえるような役割も示している。学校に馴染めない子どもは周囲の人から白い目で見られるかもしれないが、彼らにとってそうした視線から逃れる先がまさに子ども食堂なのだ。社会的であるにしろ、人間的であるにしろ両者に共通していることは自分が自分であることを確かめることのできる環境だ。この意味で居場所は社会的と個人的に分けられるが、このうち個人的は「自己領域性」と呼ばれる要素が含まれている（太田 2015：62）。これは日常生活における人間関係の煩わしさ、社会的圧力、監視などから非難することによるアイデンティティの確認である。これを子ども食堂に当てはめるならば、運営者およびボランティアに従事する方たちはこのコロナ禍で食料、食材を必要な人に届ける活動をすることによって得られる自らの役割、ポジションなどを感じることができる。逆に訪問者側は子ども食堂に出向いて、そこで誰からも受け入れられ食事や食材配布、遊びなど自然と溶け込むことができる。さらに、居場所とは人が自由に「来る」ことができ、そこに気兼ねなく「居る」こと、「去る」ことができる場所である（村上 2021：86）。村上は、居場所とは人と出会える場所であり、かつ一人にもなれる場所だと主張している。そして居場所とは単に建物というものに縛られず、特定の人物との関わりが居場所としての役割を持つとしている。さらに彼は居場所には3つの連続性があることを示した。1つ目は参加する人自身が居続けられるという本人の感性における内的連続性、2つ目は同じ住所にいつ行ってもそこにある、3つ目は同じ人と会うことができる、という3つの連続性である。この3つは運営者、地域住民の双方に当てはめることができる要素だろう。ここでこれらの居場所、つながりに関する文献、そして筆者が実際に子ども食堂のボランティアに参加してみて考えた、配布型の子ども食堂が「居場所」として成り立つための要素を示したい。本稿における居場所とは前述した通り、単に場所的なものでは無く、その事象、状況が人々に役割を与えその場所を支えているという意識が芽生えるような所であると考える。私が初めて東山ぐぅぐぅ食堂ボランティアとして参加した際に、誰も自分を拒むことが無かったし文字通り自然な形でそこに居ることができた。居場所としての子ども食堂の開催が難しい今、「場所」としての要素はなくなってしまったが、子ども食堂を必要としている人がいるからこそ子ども食堂は継続され、それを運営するためにたくさんの人が関わっている。子ども食堂は単に地域住民の為あらず、それに従事する方々の「居場所」としても重要な役割を果たしているのではないか。そして参加者側の視点に立

つときの「居場所」とは他人と顔を合わせることができて、何らかの形でコミュニケーションが取れる状況が存在していることが必要であると考える。さらに配布型では日本人特有の「恥の文化」を取り払い、多少なりとも心の枷が外れた状態で参加できる方たちもいるだろう。そうなることで、これも前述した「自然な形でそこに居て、、、」といった居場所の要素を導き出せるのではないか。以上をまとめると本稿における居場所の要素として1. そこに存在することで役割が与えられる2. 気兼ねなくそこへ訪れることができる、の2点だろう。各々の子ども食堂を分析したらもっと多くの要素がそれぞれで存在するだろうが、すべてにおいて共通することはこの2点であると考えられる。

このように子ども食堂は運営者と地域住民が互いに居場所として認識を持ち、アイデンティティを確立するような場所となるような要素を持っているのだろう。ここで代表されるのが、「のわミー子ども食堂」の地域住民からの寄付とフードパントリーから成り立つ互いが補完し合う形や、「つなしょ」の食材をもらいに来た人がそれを誰かにお裾分けできるようなシステムの構築である。筆者は特に、この2つ子ども食堂の活動における、地域住民と子ども食堂の運営者、ボランティアとの相互交流型の関係こそが、子ども食堂における「居場所」の定義としての最も重要な意味を持っていると考える。前述した、人々のポジション、役割の認知をもっとも感じられることができるの恐らくこの「つなしょ」「のわミー子ども食堂」のような活動だろう。食材や日用品のルートが子ども食堂からの一方通行では無くて、地域住民からもベクトルが向けられていることに価値を見出すべきである。余計な干渉を受けず、誰もが誰かに必要とされていると感じること、心のよりどころとしての認識を持つことができるのが理想の子ども食堂だと考える。仮に、会食を伴う交流や居場所としての子ども食堂という様態が欠如してしまっても、配布型を中心とした様々な活動を継続させることによって、地域住民には物的支援はもちろんのこと、支援する側とされる側双方になにかしらの「満たされるもの」があると思う。成、牛島は子ども食堂において、運営側つまり支える側に新しい役割を与えたり、地域社会においてさらなる繋がりをもたらしたり、心の拠り所としての機能を有していると主張した（成、牛島 2020:116）。このように、交流の場を失った現在の子ども食堂であるが、運営者、地域住民が「居場所」を感じることができる要素が十分存在している。コロナ禍で人との繋がりが欠如してしまい、特に精神面での負担が強いられるようになった世の中だからこそ従来の子ども食堂に対して、そこを居場所として認識し頼りにしていた方たちや、経済面で苦しむ方たち、口コミなどで訪れた方たちなどに配布型を中心とした様々な方策によってアプローチをすることにより、運営者、訪問者相互が居場所を見つけることが可能である。よって、密を含んだ会食などの機会が失われようとも形を変え工夫し、新たに見いだした活動形態はこの先も人々の居場所として十分機能する可能性があると思う。

第６章　今後の子ども食堂の展望

本章は筆者の今後の子ども食堂の展望を述べたものである。新型コロナウイルス第5派が過ぎたと思えば、またもや連日新規感染者報道が各局から飛び交うような状況に逆戻りしてしまい、従来の子ども食堂の姿に戻る日は少し遠ざかってしまった感は否めない。この状況下では、各子ども食堂は今後も今の活動形態を継続していくことと思う。そしてその先、光が見えコロナウイルスが収束していき本当の意味で元通りの日常が訪れた際、各子ども食堂

はどのような形をとるのか。筆者は本稿の論文を下に、その先もこのような多種多様な活動をぜひ続けて欲しい。

何回も述べたことだが、日本に存在する恥の文化を始め人々の子ども食堂へ向かう足を重くしてしまうような思いや文化を払拭していく力が配布型を中心とした活動形態に存在するからである。「東山ぐぅぐぅ食堂」でのフードパントリーでは、当日の準備中に近所に住むおじいちゃんが大量のカブを寄付してくれたり、そのわずかな活動時間においても住民の方たちが世間話をしたり、子ども達が走り回ったりと、コロナ禍においてこのフードパントリーなどほんの30分の活動が地域の人々の拠り所として存在している。会食は小恥ずかしい、少し参加しづらくて行けないような人たちにもフードパントリーに参加し、地域の暖かさや居場所としての子ども食堂を僅かでも感じることができれば、それが一番いいことだと思う。

各子ども食堂は様々な目標や課題を抱えている。そして地域レベルで見た時にも子どもの数や貧困状況、感染状況などもまちまちなので、そのような状況下で一概に会食型を推し進めるのは少し無理やりな感覚も否めない。だからこそ、比較的開催しやすく、コロナ禍においてリスクの小さい配布型から地域との繋がりを再構築していくことが第一だ。地域や立地ごとにそれぞれの特徴もあるので、場合によっては「日進きずな子ども食堂」などのように一工夫加えた活動形態が必要である。配布型、会食型ともにメリットデメリットを抱えているが、それを互いに補い合う意味でもアフターコロナでは両者を併用した活動形態が望ましいと考える。先述した配布型を中心とした現在の様子、従来の活動形態による活気溢れた様子とを組み合わせることができれば、より多くの人が子ども食堂の恩恵を受けることができると考えるからである。

ただこれには多大な費用と多くの人材が必要だ。インタビューをさせていただいた子ども食堂の多くは若い人材がまだまだ足りないとおっしゃっていた。それには子ども食堂事態の知名度の課題も未だ残されていると思う。どのように人を集め、地域住民を受け入れる体制を整えていくかも今後の課題である。そして忘れてはならないのは当事者が配布型の活動をただの食料配布だと思って活動してはいけないという意識である。ここをなぁなぁにしてしまったら、それこそばら撒きだと言われてしまう。地域に根差した活動が根本にあるので、きちんと訪れる人の顔を見ながら一人一人丁寧に心を込めて対応することが求められる。

第７章　結論と今後の課題

以上のことを踏まえ、コロナ禍において急速に普及した配布型子ども食堂を地域住民、そしてそこへ携わる人たちにとっての居場所として成立させるためには、「つなしょ」に代表されるような、双方が互いに役割などを認識できるような体制づくりが必要である。

そして、前章で述べた子ども食堂が実際どの程度の活動がベストなのか、具体的な数字や指標が無いためここでは詳しく語ることはできない。よって、今後も継続的にボランティアとして子ども食堂に関わることによって居場所と言い得るための条件の詳細化に努めていきたい。運営者側はどのような役割を得て、どのような想いを抱えながら活動をしているのか。地域住民は今の配布型の子ども食堂から何を得ているのか、そしてなぜ通い続けているのか。前述した２点の要素から、今後も引き続き居場所が在る子ども食堂のことについて推論を重ねていきたいと思う。そしてこの推論から導き出した答をもって、コロナ禍で主流となった配布型の子ども食堂が、今後どのような意味を持ち地域においてどのような存在となってい

くのかを論じていきたい。

【参考文献】

藤竹暁、2000、『現代人の居場所』至文堂.
太田明、2015、『〈居場所がない〉ということ―承認をめぐる闘争と病』学文社
藤谷秀、2015『居場所と社会で生きる権利』学文社
阿部彩、2011『弱者の居場所がない社会―貧困・格差と社会的包摂―』講談社
成元哲、牛島佳代、2020「コロナ禍の子ども食堂:食卓をめぐるソシアビリテの誕生と変容」『現代思想』48－10(8)：117－118